

猪6 村の変遷と猪 = = = 猪・鹿・狸より

誰しもそう言うたことであるが、近頃の猪は以前のワチオトシアナ時代から較べると、伶俐になったばかりでなく、性質も悪くなったと言う。悪くなったと言うのは、畢竟性質が単純でなくなったことである。わずかのものの響きにも、変ったものの香にも、怖れて近づかなかつたはずの猪が、たちまちそれらに慣れて平気になることであつた。そうかと思うと次第に出没が巧妙になって、一夜の間に一〇里一五里の山の遠国から、峯伝い窪伝いに風のように渡つて来て、その夜の中にふたたび元の棲み家へ還つてしまうと信じられた。猪が出たと聞いて附近の山を捜したのではもう遅いとは、現に狩人が言うていた。



軒端に積んだ稲束を襲い、屋敷廻りの甘藷穴を掘り返すなどは、五〇年前を考えれば何の珍しいことでもなかつたが、当時と比べると、猪の本拠であつたはずの山がひどく明るくなった後だつただけに、猪がずるくなったように考えられたのである。今一つの理由は、一頃盛んに木が伐られた時に、ほとんど後を絶つた事実もあつたので、その後出る猪は、別もののようにも考えられたのである。

山の姿が以前と較べてひどく変つたことは、自分などの記憶から判断しても、著しいものがあつた。屋敷の裏手の杉木立へ入れば、一丈もある齒朶の茂みが続いて、笥の径にかぶさつた奇怪な格好の杉の古木には（これをジャンカと呼んでいた）、毎年木鼠が巢食つたのでも想像される。前の畑のクロには、夕方になると畑中を影にするような榎の大木があつた。屋敷内にあつた榿（かや）の大木の根元は、近づくこともできないほど、蔓草類が絡みあつてゐた。表の端にまで枝がかぶさりかかつたところは、その木一つでも、充分山村の風趣があつた。これらは自分の家だけについてであるが、村全体を見渡しても、山を分けて家があつた感があつたのである。

わたしのおはなが・・・。



猪が好んで出た山田の畔続きの草場（くさんば）柴山には、きまつて合歡木（ねむのき）が遺してあつて、それが相当古木になつてゐた。夏分など濃い緑の草生の中から、白い木肌が立ち並んで、あの虹色の美しい花の咲く時などは、山の美しさ以上、果てしない山の奥深さがあつた。草場へ合歡木を立てること

は、草のために宜いと言いつていたのであったが、今ではそんなことを信じる者はなかつた。何でも日陰が悪いとして、片端から伐つてしまった。齒朶の茂みは下刈のたびに浅くなり、萱場ボローは切り開いて、猪の立ち寄る影はほとんどなかつたはずである。まして昔は同じように出没した、鹿や山犬は、とくに姿を匿してしまつて、夜でも汽車の笛を聞くような処へ、出てくる猪の気が知れなかつたのである。



猪除けの案山子にしても、追う方法でも、雑然としたいかにも心ない遣り方であつたが、実はもういなくなるはずだに、まだかまだかで、一日延ばして日を送つてたせいもあつた。

別に説をなす者は、深山の御料林等が伐採されるたびに、そこを追われた猪が迷い出るとも言つた。あるいはその辺の消息は事実であつたかも知れぬ。現に鳳来寺御料林が払下げになつた年には、夥（おびただ）しい猪がでたそうである。